

# グラス & シード

2005・3  
第 15 号

## 目 次

1. 特集 シンポジウム「人と牛とのふれあい」  
- 自然・生活体験への誘い -
  - 1) シンポジウムにおける社団法人日本草地畜産種子協会浅野会長の挨拶 .....2
  - 2) 特別基調講演 あなたの遺伝子が目覚めるとき  
筑波大学名誉教授 村上 和雄 .....3
  - 3) 事例報告
    - (1) 公共牧場の運営と牧場体験  
岩手県葛巻町町長 中村 哲雄 .....5
    - (2) 牛飼いと地域社会  
なかとみ牧場 中島 邦造 .....7
    - (3) 『いのち』を感じる体験学習  
(社)日本ネイチャーゲーム指導者養成委員 .....9
  - 4) パネルディスカッション コーディネーター  
NPO法人ホールアース研究所 広瀬 敏通 ...11
2. 家畜動物学概論  
ホールアース自然学校 代表 広瀬 敏通 ...15
3. 事務局からのお知らせ  
協会のホームページをリニューアルしました...22
4. 俳 壇  
牧場の季節を詠う.....24

社団法人

日本草地畜産種子協会

## (社)日本草地畜産種子協会の発行本

(社)日本草地畜産種子協会は草地管理についての技術必携書として農水省監修のもとに「草地管理指標」を順次発刊してまいりましたが、このたび標記の書を新たに改訂発刊しました。

本書は(独)農業・生物系特定産業技術研究機構畜産草地研究所の小川家畜生産管理部長を主査に又各専門分野のオーソリティを編集委員に委嘱して検討を加え、草地管理のうち、管理作業と採草利用について編纂したものです。

この書を含め、下記の「販売書籍」欄に記された草地管理シリーズは、我が国の草地管理についての技術指標を網羅したもので、草地管理に携わる技術者の必携の書であると同時に草地畜産を学ぶ者の教科書としても使えるものです。関係者の方々は是非この機会にご購入下さい。

購入は下記要領で！

### 販 売 書 籍

区 分	本 の 名	価 格 (円)	備 考
既刊	草地管理指標 －草地の管理作業編－ －草地の採草利用編－	1,600円	消費税込み・送料別途 (H15.12月)
既刊	草地管理指標 －草地の維持管理－ －草地の土壌管理及び施肥編－	2,000円	消費税込み・送料別途 (H8.3月)
既刊	草地管理指標 －草地の放牧利用編－ －放牧牛の管理編－	1,600円	消費税込み・送料別途 (H12.7月)
既刊	草地管理指標 －飼料作物生産利用技術編－	2,000円	消費税込み・送料別途 (H13.10月)
既刊	草地開発整備事業関係通知集	8,000円	消費税込み・送料別途 (H12.11月)
既刊	粗飼料の品質評価ガイドブック (改訂版)	2,400円	消費税込み・送料別途 (H13.13月)
既刊	草地開発整備事業計画設計基準 (改訂版)	4,900円	消費税込み・送料別途 (H11.2月)

購入申し込みの際は、

1. 郵便番号・住所
2. 氏名
3. 電話番号・FAX番号
4. 書籍名・冊数

を明記の上、下記宛て郵送、FAX、E-mailにてご注文ください。送料は実費、但し10冊以上まとめて納品の場合は当協会が負担します。書籍送付時に請求書を同封しますのでお振り込みください。

申込先：社団法人 日本草地畜産種子協会

〒104-0031 東京都中央区京橋1-19-8 大野ビル3F

1-19-8 Kyobashi Chuoku Tokyo Japan

FAX：03-3562-1651・1652 E-mail：info@souchi.lin.go.jp

# 特集

## シンポジウム「人と牛とのふれあい」

### 自然・生活体験への誘い

近年、畜産の生産現場は、奥地化するとともに散在化し、都市住民を始めとする消費者の多くは畜産の現場に接する機会が少なくなっており、また国内の畜産生産の現状や畜産の果たしている役割等に対する消費者の理解が不足し、ひいては輸入畜産物の消費拡大や自給率の低下へとつながっている。

一方、教育の場においては、低学年児童の犯罪事件の例をみるまでもなく、命の尊さや倫理観、正義感を育む教育の重要性が高まってきており、生活体験や自然体験学習を教育の現場で積極的に取り入れる動きが急速に高まっている。

こうした中で、自然生態系に根ざした草地畜産の生産現場は、食の安全性の確保や安定的な供給はもとより幼児から小・中学生等に至る体験学習を総合的に習得できる最適な場として評価されつつある。

(社)日本草地畜産種子協会は中央競馬会の助成事業である「畜産理解醸成手法確立のための調査研究事業」(平成12年度 - 平成16年度)において、畜産現場と都市住民等の交流のあり方、手法等を検討するとともに、畜産体験学習の現場に適する各種教材や副読本を作成・配布するほか、事前学習用としてインターネットでバーチャルな牧場見学ができるページを作成し、関係者の便宜に供してきた。

平成16年度は事業の最終年度となることから、事業の総まとめとして広く世の中に畜産体験学習の周知を図るとともに、草地畜産がもつ機能、たとえば「命を育む場」等の教育的側面に着目した活動の重要性とそのあり方や健全な発展方向について意見交換をおこなうシンポジウムを開催することとし、当協会主催で、平成17年2月1日(火)、東京農業大学百周年記念講堂において、約650名の参加を得て行われた。



会場の東京農業大学

プログラムの内容は次のとおりである。

#### 1. 特別基調講演

村上和雄・筑波大学名誉教授

テーマ：「あなたの遺伝子が目覚めるとき」

#### 2. 事例報告

中村哲雄・岩手県葛巻町町長

テーマ：「公共牧場の運営と牧場体験」

中島邦造・なかとみ牧場経営

テーマ：「牛飼いと地域社会」

三好直子・(社)日本ネイチャーゲーム協会指導者養成委員

テーマ：「『いのち』を感じる体験学習

#### 3. パネルディスカッション

コーディネーター：広瀬敏通・NPO法人ホールアース研究所代表理事

以下、シンポジウムの全体概要を紹介する。



## 社団法人日本草地畜産種子協会浅野会長挨拶

本日は「人と牛とのふれあい」をテーマにシンポジウムのご案内をしましたところ折しも厳しい寒さの中を北は北海道、南は沖縄に至るまでこのように多数の方々のご参集を賜り主催者を代表して心から厚くお礼を申し上げます。

ご案内のとおりわが国の畜産はこれまで海外からの輸入飼料に依存した集約・加工型の拡大路線により世界でも類を見ない発展を遂げてきましたが、反面家畜ふん尿による環境問題や輸入飼料に起因すると見られる伝染病の汚染等が懸念されるとともに、食品の安全性の確保や自給率の向上を図る上からも国内資源を活用した資源循環・持続型の畜産への転換、育成が強く求められているところであります。

一方、教育の場においては、近年低学年児童の犯罪事件の例を見るまでもなく、命の尊さや倫理観、正義感をはくむ教育の重要性が高まってきており、生活体験や自然体験学習を教育の現場で積極的に取り入れる試み・動きが活発になってきました。

こうした中で、自然生態系に根ざした畜産の生産現場は、食の安全性の確保や安定的な供給はもとより幼児から小・中学生等に至る体験学習を総合的に習得しやすい格好な場所として広く評価していただくようになって来ました。

私どもの協会は国内資源を活用してできるだけ自給飼料に依存した畜産経営を一つでも多く作っていくために飼料増産推進運動や消費者の方々に畜産の現場をよく理解していただくための生産者との交流・ふれあいなどの各種支援事業を国のご指導の下に実施している団体であります。

「人と家畜とのふれあい」を通して、より健全で、より充実した生活のスタイルの実現に少しでもお役に立てるためには今後どのような事業の取組み、活動が望ましいのか本日は体験学習の先駆的リーダーとして活躍しておられる専門家の皆様、岩手県葛巻町の中村町長さん、草地放牧酪農家の中島



挨拶を行う浅野会長

さん、ネイチャーゲーム協会の三好さん、ホールアース研究所の広瀬さんの4名の方々に講師兼パネリストになっていただきそれぞれ現場で取組んでおられる事例の報告、今後の活動に向けてのご提言などをしていただくとともに、本日ご出席の皆様方との意見交換もできればしていただきたいと願っております。

今回は、特に遺伝子解析で世界的にご高名な筑波大学名誉教授の村上和雄先生に特別講演をしていただくことになりました。先生は長年の研究で「人それぞれの感性は遺伝子と繋がっていること」「笑いが血糖値を下げる遺伝子と関係していること」などを世界に先駆けて解明され現在大きな反響を呼んでおります。また、両親から受け継いだ「遺伝子の多くは眠ったままになっており、眠っている遺伝子をオンにすることによって優れた才能を更に大きく開花させることができる」と本日はその「眠れる遺伝子の目覚めさせ方」について判りやすくお話していただくことにしております。家畜の世界においても良い飼養環境の下で眠れる遺伝子のスイッチがオンになれば産乳、産卵、産肉能力が今以上に発揮できるようになるのではないかと期待しています。

村上先生並びにパネリスト・講師の皆様にご心からお礼申し上げますと共に本シンポジウムが実り多いものになりますよう皆様と共に祈念してやみません。

終わりに今回のシンポジウム開催に当たり会場の設営等格別のご高配、ご指導を賜りました東京農業大学の進士学長をはじめ関係の諸先生方に対し心から厚くお礼を申し上げ開会の挨拶に代えさせていただきます。

## 特集 シンポジウム「人と牛とのふれあい」

### 特別基調講演 あなたの遺伝子が目覚めるとき

筑波大学名誉教授 村上 和雄氏



基調講演の村上教授

村上和雄氏 略歴

- 1936年 奈良県生まれ。
- 1963年 京都大学大学院博士課程修了。アメリカ・バンダービルト大学医学部助教授を経て、
- 1978年 筑波大学応用生物化学系教授に。
- 1983年 高血圧の原因である酵素「ヒト・レニン」の遺伝子解読に成功し、世界的な業績として注目を集める。
- 1990年 マックス・プランク研究賞を受賞。
- 1996年 日本学士院賞受賞。
- (財)国際科学振興財団 バイオ研究所 所長。「心と遺伝子研究会」代表。著書に『生命の暗号』/『生命の暗号(2)』(サンマーク出版)、『生命のパカカ』(講談社+ 新書)など多数

### 基調講演の概要

健康遺伝子スイッチON

「心と遺伝子研究会」という研究会の代表をしている。心と遺伝子というのは何の関係もないと思っている人が多いと思うが、人と心のありよう、心の動き・動きは、遺伝子の働きに大きな影響を及ぼすと考えている。

たとえば、笑いというものがどの遺伝子のスイッチをONにし、どの遺伝子をOFFにするかという実験を行った。糖尿病の患者を対象に、1つのグループは「糖尿病の仕組みについて」という大学教授の講義を聴いてもらった。もう1つのグループには吉本興



村上教授の著書

業の漫才を聞いてもらった。

この結果、大学の講義を聴いたグループの血糖値は大幅に上昇したが、漫才を聞いたグループの血糖値が明らかに下がるということが判明した。笑いによって血糖値が下がったということはそのうしろで遺伝子が働いているのではないかと思われる。

ヒトの遺伝子はほとんどが眠っている

ヒトの多くの遺伝子は眠っているということが分かってきた。ヒトの全DNAのうち本当に働いているのは3%前後で、あとの97%は何をしているのかわからない、眠っているのか、さぼっているのか、さらには寝ているのか、もしくは将来のためにあるのか、ともかくヒトの遺伝子は予想よりはるかに少ない遺伝子しか働いていない。つまり、人間の潜在能力はとてつもなく大きいと考えられる。

人間には約60兆の細胞があるが、細胞には同じ遺伝子情報が組み込まれている。しかし、なぜ、髪の毛の細胞は髪の毛にしかならず、心臓の細胞は心臓にしかならないのか。このことは、髪の毛

には髪の毛の遺伝子のスイッチがONになっているが、それ以外の遺伝子はOFFになっていると考えられる。

人生をよりよく生きるためには、元気などをおこさせるいい遺伝子をONにしたり、発がんなどの悪い遺伝子をOFFにできれば私たちの可能性は何倍にもなるはずである。

それでは、どういうときに良い遺伝子がONになって、どういうときに悪い遺伝子がOFFになるのか。遺伝子はつねに不変であるが、遺伝子の働きはそれを取り巻く環境や外からの刺激によって遺伝子がON・OFFになるということが分かってきた。

たとえば、運動すると筋肉がつくが、この場合、筋肉の蛋白をつくる遺伝子がONにならないとならなければならない。これは物理的な刺激が遺伝子をONにする例であるが、その人の心の働きや思いが遺伝子のON・OFFに関係しているのではないかと考えられるのである。その心の働きを2つに分けて考える。もう1つは私どもの快適な環境、すなわち快い気持ち、陽気な気持ち、笑い、感動、喜び、それらは良いストレスが良い遺伝子をONにして、悪いストレスは悪い遺伝子をONにするという仮説をだし、これをなんとか証明したいと思っている。

#### 存在するサムシンググレート

ところで、ヒトの核の中にある1ゲノムといわれるものは30億個もの化学の文字から成り立っているのであるが、一体、これを書いたのは誰か？しかも単に書き込まれているということばかりではなく、それが確実に働いているという事実である。人間を超えた大きな存在を意識せざるを得ず、これを「サムシング・グレート」と呼んでいる。

今から40年ほど前に、植物も動物も人間も、生物はすべて同じ遺伝子暗号を使って生命を維持しているという大発見があった。生物は1つの細胞からはじまったということである。私たちが草木を見て安らぎ、動物にふれあうことで親しみを感じるのにはあらゆる生物の起源を1つにする親戚兄弟だからかもしれない。

私どもの遺伝子が眠っていることが多いのである。ノーベル賞をもらった人と普通の隣のおじさ

んの遺伝子とは全く同じである。人間と生まれてきたら99.99%以上同じ遺伝子暗号をもって生まれてきている。

良い遺伝子をONするには

それでは、良い遺伝子をONにするにはどうしたらよいか

- 1 自分の好きなことをすること
  - 2 自分が生き生きするような環境にもっていくこと
  - 3 目標をもつこと
  - 4 感謝すること
- さらに、子供を対象とするなら、
- 1 褒めること
  - 2 自然体験をさせること
  - 3 (授業等を)わからせること

などが遺伝子をONにしやすいと思う。

子どもは、決して努力や知恵だけでできているものではない。寝ている遺伝子をONにすることができれば、民族的にすばらしいと思う。そういう思いをしている志を集めて、日本を元気にしていきたいと思っている。



会場で著書にサインされる村上教授

## 特集 シンポジウム「人と牛とのふれあい」

### 事例報告 1)公共牧場の運営と牧場体験

岩手県葛巻町町長 中村 哲雄氏



事例報告を行う中村氏

中村鉄雄氏 略歴

1948年生まれ

1971年 日本大学農獣医学部獣医学科

1971年 葛巻町役場勤務(畜産担当)

1976年 社団法人葛巻町畜産開発公社へ出向。以来23年間勤務

1999年 葛巻町退職

1999年 第5代葛巻町長就任(現在、2期目)

(社)葛巻町畜産開発公社理事長、葛巻高原食品加工株式会社社長、株式会社グリーンテージくずまき社長、エコワールドくずまき風力発電株式会社社長、岩手大学獣医学科非常勤講師、風力発電推進市町村全国協議会理事、中央酪農会議教育ファーム推進委員、岩手県総合計画審議委員、バイオガス事業推進全国農業会議所協議会監事ほか多数

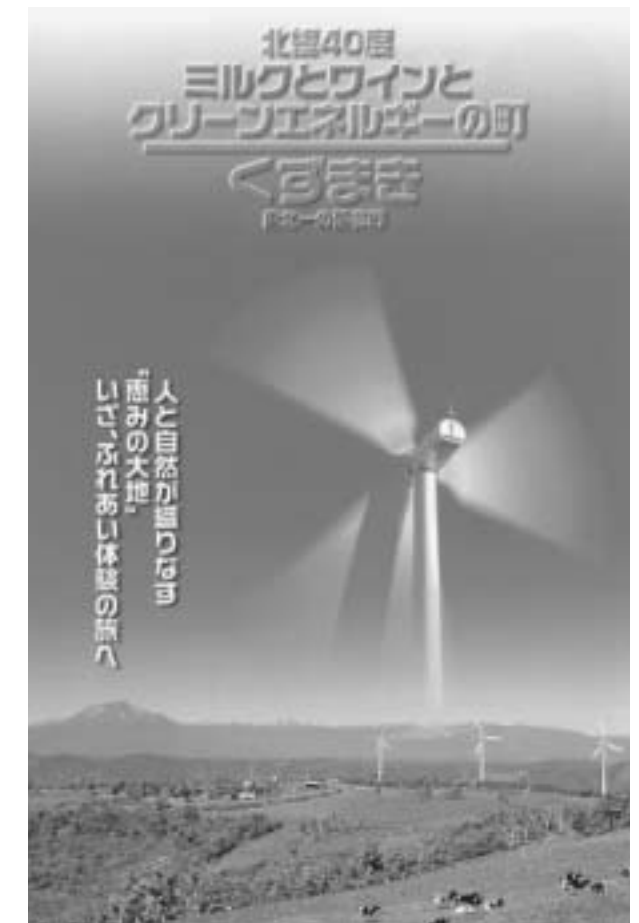
#### 報告の概要

ミルクとワインとクリーンエネルギーが売り

葛巻町は「ミルクとワインとクリーンエネルギーの町葛巻」をキャッチフレーズのもとに人口8800人の町で、食料・環境・エネルギーの各分野で事業を展開しながら町を発展させてきた。食料の分野では、広大な草地を利用した畜産が盛んで、現在、人口8800人に対し牛は1万3,500頭となっている。このうち酪農は東北一で、毎日120トンの生産量を誇る。

エネルギーの分野では葛巻中学校に太陽光発電、15本の風力発電、また、くずまき高原牧場には畜産バイオマス発電を行い、町の3000世帯に対し約1万7000世帯分の電力を供給している。

中村町長は酪農家に生まれで獣医師である。大学卒業後葛巻町に就職したが、昭和51年に設立された(社)葛巻町畜産開発公社に出向後、23年間牧場業務を担当し、現在のくずまき高原牧場の基礎を築いた。





よい土、よい草、よい牛づくりが基本

くずまき高原牧場の総面積は1800ヘクタールである。当初、夏期放牧の365頭で出発したが、資金も信用もなく、牛もなかなか集まらない状態が続いたが、「よい土づくり、エサづくり、牛づくり」をモットーに頑張り、各地の共進会等で入賞牛がでてきたことで現在の牧場へと発展してきた。現在の牧場は、飼養頭数が3400頭に達するするとともに、特産品やホテル事業等の事業を拡大し、いまや14事業を展開する公共牧場となっている。

葛巻高原牧場は情報発信基地

昭和55年、くずまき高原牧場酪農研修センターが設置され、後継者育成教育を担った。その後、グリーンツーリズムへの取り組みを開始した。牧場がもっている多面的な資源、機能、人材などを生かして「緑」、「空間」、「ゆとり」といったものを国民に提供するとともに、畜産への理解を深めてもらおうとする狙いがあった。

さらに、昭和61年に酪農教育ファームの認証を受ける。酪農教育ファームでは、畜産への理解を深めてもらうことを第一義としながら、「牛肉を食べる」、「牛乳を飲む」といったことは牛の命をいただいているのだということをメッセージとして伝える体験学習でありたいと考えている。酪農教育ファームの年間利用者は2万人となっている。親子で参加する「わくわく子供ファーム」を毎週土日に開催。冬期間は13泊14日の「スノーワンダーランド」を実施している。

また、知的障害者や保護観察期間の青少年を研修生として迎え入れるなど、可能な限り牧場を「開放」していく方針である。

葛巻町にはくずまき高原牧場を含めて三つの第三セクターを有するが、これらの第三セクターの売り上げは年間約17億円で、約6000万円の純利益を上げ、160人の雇用を創出している。(うち70名がUターン青年である。)

第三セクターの活躍は地域社会に自信をもたらし、地域経済の活性化、若者の定着等葛巻町への貢献は大きい。



くずまき高原牧場に関する問い合わせ先

〒028 - 5402

岩手県岩手郡葛巻町葛巻40 - 57 - 125

電話 : 0195 - 66 - 0211

ファックス : 0195 - 66 - 0755

## 特集 シンポジウム「人と牛とのふれあい」

### 事例報告 2)牛飼いと地域社会

なかとみ牧場経営 中島 邦造氏



事例報告を行う中島氏

中島邦造氏 略歴

1942年 高知県山地酪農家岡崎正英氏の三男として生まれる。

1964年から1965年 ニューージーランドで放牧酪農を学ぶ。

1967年から静岡県富士宮市で酪農を営み、現在に至る。

富士ミルクランド株式会社取締役

著書に「酪農・経産牛98頭」(農文協:農業技術体系(畜産編)・2001年第8巻)他

土(土壌微生物を含む)の社会 - 草地社会 - 牛の社会 - 人間の社会  
それぞれの健全化を図るために放牧形態を取り入れた酪農を実践。

#### 報告の概要

牧場の生い立ち

静岡県富士宮根原地域(朝霧高原)は昭和21年、食糧増産をめざす開拓地として長野県開拓団を主とする人達で拓かれてきた。現在は2世の50才代(このうちこの何戸かは3代目となっている。)を中核とする酪農生産地である。

平成8年、富士開拓農業協同組合は都市と農村の交流の場として「富士ミルクランド」を設立し、運営をしてきたが、生産者体質から脱皮できず、平成16年10月にこれを改組し新たに「株式会社富士ミルクランド」を発足させた。これにより都市と農村の交流や酪農体験学習の場としてさまざまな活動を展開している。

基本は健康な牛との共存

中島氏は自ら「なかとみ牧場」を経営する傍ら、ミルクランドの取締役の要職にある。酪農経営でもっとも楽で儲かる重要なポイントは牛が健康であることとし、牛が健康であれば飼養する人間の

労働時間やストレスが減少する。健康な牛を維持するための基本的な考え方は「雄牛と雌牛が草原にいれば乳はでる」ということにつける。

放牧型酪農の特徴としては、牛に対し日光浴、新鮮な空気が与えられ、運動等により血液の循環が良くなるとともに、心肺機能や足腰を強くする。

ふん尿の資源化が容易、牛の本来の機能を十分に発揮できる。牛とともに生きているという生活感を味わえるといったことなどがあげられる。



なかとみ牧場の放牧風景

一方、中島氏は長い酪農経験を振り返って、酪農経営の当初は牛に使われる時代だった。その後、牛を自分の支配下に置けば楽になるのではないかとの考えになったが、今度は管理に追われ、結果的に経営がうまくいかないということに気がついた。最近、「自分は牛のことを何も知らなかった」ということに気がつき、牛と共生すればうまくいくのではないかという発想をするようになり、それ以来、酪農が楽しくなった気がする。酪農には四つのことが重要である。1つは牛にエサをやること、2つはふん尿を始末すること、3つ目は乳を搾ること、そして4つ目として、牛を観察することが大事である。牛をよく観察し、牛が我々に対し何を訴えようとしているかを知ることがきわめて重要なことである。



畜産理解醸成検討委員による現地視察

#### 体験学習の課題

酪農体験学習については、酪農というものを知らしめるという観点から重要で小さいながらもさまざまな体験学習を提供してきたが、今後とも積極的に取り組んでいく。

しかし、酪農体験者を受け入れるにあたって、酪農家にとって、生産面でマイナス要因となる、体験学習者の安全をどう確保するか、体験学習者へ気を配りすぎて、本業の酪農経営がおろそかにならない工夫が必要、体験学習者の受入に伴う経費負担を明確にしておくこと、などが酪農体験学習実践上の留意点として上げている。

#### 富士ミルクランドに関する問い合わせ先

〒418 - 0103

静岡県富士宮市上井出3690

富士ミルクランド農業体験事務局

電話：0544 - 54 - 3690

ファックス：0544 - 54 - 2932

## 特集 シンポジウム「人と牛とのふれあい」

### 事例報告 3)『いのち』を感じる体験学習

(社)日本ネイチャーゲーム指導者養成委員 三好 直子氏



事例報告を行う三好氏

#### 三好直子氏 略歴

1989年 日本ネイチャーゲーム協会の前身であるナチュラルリスト企画に入社。

ネイチャーゲームの普及および指導者養成、アクティビティ開発、エコツアーに携わる。

#### 報告の概要

##### 自然の不思議にふれる

ネイチャーゲームは、米国のナチュラルリスト ジョセフ コーネル氏が考案した自然体験のためのプログラムで、ゲームを通して、見る、聞く、触れる、嗅ぐといった人間がもつ感覚を使って、直接自然とふれあいながら、自然の不思議さや理解を深めるための活動である。自然体験プログラムで



ゲーム「私は誰でしょう」を楽しむ会員

ある。現在、ネイチャーゲームの指導員は全国で1万人を越え、200以上のボランティアグループが、ネイチャーゲームを活用した、自然と人とのふれあいの場づくりを行っている。

##### ネイチャーゲーム活動

現在、自然界について、テレビを通して決定的な瞬間を見ることが出来る。また、インターネットで検索するとたいの情報を集めることができる時代である。しかし、自然と直接ふれあうことにより得られる命を感じるとか、愛情をもつといったことを教育するにはどうしても自然との直接的な体験が必要である。

スライドによるネイチャーゲームの具体的な説明があり、例として取り上げられたゲームは、「私の木」、「動物交差点」、「食物連鎖」、「サウンドマップ」、「フィールドピンゴ」、「マイクロハイク」、「木の鼓動」、「目隠し歩き」等であった。

いずれのゲームは、次のモットーを基に考えられている。

- 1 もっとからだで考えよう





「木の鼓動」を聞く子供たち

- 2 本物が大事
- 3 五感を使って感じてみよう
- 4 自然が一番の先生

体験学習という立場から牧場を見ると、牧場はきわめて優れた可能性を秘めている。

#### 牧場の体験活動に期待

牧場の持つ可能性としては、

- 1 本物の動物にふれあえる場所であること
- 2 さまざまな生き物が暮らす場所であること
- 3 食べ物が生み出される場所であること
- 4 人の暮らしがある場所であること
- 5 広い草地、のびのびとした空間であること

等が考えられるが、いずれにしても体験学習のための題材が極めて豊富であるため、牧場は真に幅広い自然体験の機会を提供することができる優れた場となる可能性をもっている。



#### ネイチャーゲームに関する問い合わせ先

〒160 - 0022

東京都新宿区新宿5 - 18 - 20

社団法人日本ネイチャーゲーム協会

電話：03 - 5291 - 5630

ファックス：03 - 5291 - 5633

## 特集 シンポジウム「人と牛とのふれあい」

### パネルディスカッション

コーディネーター

NPO法人ホールアース研究所代表理事 広瀬 敏通氏



#### 広瀬敏通氏 略歴

1950年 東京生まれ

1971年 単身インドに渡り、南インド、カルナータカの荒野で障害児、孤児のための村づくり開拓を行なう。

1978年 単独で、シルクロード踏破。

1980年 カンボジア難民医療協力事業で、タイ・カンボジア国境に日本政府事務所（ジャパンメディカルセンター）を開設。主任調整員（事務所長）。

1982年 富士山麓、芝川町に動物農場を設立。動物体験・自然体験の場づくり

1987年 団体名をホールアース自然学校に改称。代表となる。

1998年 ホールアース自然学校沖縄校（名護）開校。富士山本校（西富士・芝川町）を建設

2000年 環境庁直轄施設「田貫湖ふれあい自然塾」オープン。塾頭就任。（社）日本環境教育フォーラム常務理事、内閣府認証NPO法人日本エコツーリズム協会理事、内閣府認証NPO法人自然体験活動推進協議会（CONE）理事、内閣府認証NPO法人富士山自然体験活動推進協議会（F-CONE）代表理事など。

著書に『子供に伝える野外生活術』（地球丸）、『自然語で話そう』編著（小学館）、『日本型環境教育の提案』共著（小学館）、『自然との共生を目指す環境学習』共著（玉川大学）など。

#### パネルディスカッションの概要

パネルディスカッションは事例報告者である中村哲雄、中島邦造及び三好直子の3氏にコーディネーターとして広瀬敏通氏を加えた4氏で行われた。主要なテーマを 体験学習指導者の人材養成をどのように考えるか、 体験学習のプログラムをどのように考えたらいいか、 体験学習の安全確保をどう考えるかの3点に絞って議論が行われた。

#### 1. 体験学習指導者の人材養成をどのように考えるか

中村哲雄氏

体験学習指導者としては、目配りや気配りが上手で、しかも牛の動きを敏感に察知できる資質をもっている者が望ましい。体験学習の実施中に、学習者や牛が飽きてきたと思われるようなとき、

学習内容や牛を変えたり、休憩を入れたりするなど人間、牛の動きを総合的にみられる者がインストラクターとして適しているように思う。

くずまき高原牧場の職員数は110名であるが、現在はここから適していると思われる人材を選抜し、配置している。また、自分たちの仕事ぶりそのものを見てもらい同時に体験してもらうということを基本に考えているので体験学習のために職員を派遣して勉強させることはしていない。しかし、将来、体験学習の規模がさらに大きくなるようになればインストラクターといった名称の専門職としての職員を採用することや職員を派遣し研修や勉強の機会を増やすといったことが必要になるかも知れない。



中島邦造氏

現在、体験学習を専門する職員を採用するため公募している。

## 2 体験学習のプログラムをどう考えるか

三好直子氏

資料を拝見しての想像であるが、乳搾り、バター作りといったことが中心に実施されているように思う。

しかし、牧場自体がすばらしいフィールドであるからテーマは家畜だけではないはずで、さまざまな生き物が生きているし、人間もそこで働いている。現在の子供は外で遊ぶ、異年齢の者と遊ぶといったことがなくなってきている。このため、現在の「牛とふれあう」「バターをつくる」といったことから幅を広げて、牧場のフィールドを生かした活動はどんなものができるかといった視点で体験学習を見直せば相当の広がり生まれるのではないかと考える。

宣伝めいて恐縮であるが、私たちのネイチャーゲームなども積極的に取り入れてみてはどうかと思う。

中島邦造氏

体験学習を受け入れる農家によってプログラムが異なることが特徴といえ特徴である。酪農家によっては養鱒場があったり、野菜をつくったりしている。来訪者の要望によって農家を選択できるようにしている。

抽象的であるが、我々が牛から教わるという体験でありたいと思う。



広瀬敏通氏

富士ミルクランドのやり方は、自分の牧場だけではできないことが、たくさんの農家が集まることにより体験学習のメニュー化ができるという成功例だと思う。

乳を搾ったりバターを作ったりすることが体験学習のプログラムだと思いがちであるが、そうしたものを通じて伝えられる牛飼いの、牧場の人の暮らしぶり、牧場の人の喜びといったものが実は一番の魅力になると思う。牧場の人の人柄や、その人生を垣間見ることができるといえる体験があると、パッケージ化した体験学習にはない本当にすばらしい牧場体験、牧場に出かけて過ごした1日の濃さを味わうことができるのではなかと思う。

中村哲雄氏

くずまき高原牧場は、まず畜産を理解してもらいたいということを第一義とし、食の尊さ、命の尊さをメッセージとして伝えることが基本方針である。また、牧場の施設等が充実してきたので、牧場業務のすべてについて体験できると自負している。

## 3 体験学習の安全確保をどう考えるか

広瀬敏通氏

安全面に関し牧場ははたして気楽に行き大丈夫なのかという大方の疑問がある。牛側からみてやたらと人がたくさん来てもらっても困る。

牧場に学校から体験学習をしに来てても学校の先生は動物の専門家でないから先生が引率して全部やるというのには無理がある。やはり牧場の人が牧場での振る舞い方を教えてやる必要がある。

「体験」というものはさまざま要素があって、自分にとって気持ちのいい部分だけをつまみ食的に体験することは、実際の場面では本来あり得ない。気分の悪い体験、痛い体験、汚れてしまうような体験、そういう全部をひっくるめて体験学習をすべきという考え方もあるが、しかしそのような場合でも、牛にボンと蹴られてしまう可能性が存在する。

牛という生き物自体の安全と人間の安全、その

バランスをどう確保するのが問題である。

中島邦造氏

よその人が来るということは牛にとってマイナス要因である。

基本的には牛に自由に任せておくのが一番安全である。

来訪者に対しては、牛に危害を加えないかぎり牛は安全であることや牛の嫌いなことをしないよう事前に十分に注意することにしている。

個人的には少々牛に蹴られて痛いと感じたり、尻尾に振られて痛いと思ったりすることは逆にいい体験になるのではないかと考えているが、その辺の限度・程度をどこにおくかが正直な悩みである。

中村哲雄氏

体験学習に充てる人材は、気の利く人、ホスピタリティ精神にあふれている人が望ましい。

一方、体験学習に充てる牛は、どんなことがあっても足などをあげない優しい牛を選抜する。牛が飽きていると感じたら牛を変えようといった機敏な判断が必要である。

限りない安全を旨としているが、万一の場合に備えて短期の保険に加入することを勧めることにしている。

## 会場からの質問に対するディスカッション

質問 1 公共育成牧場において、一般の来訪者に対し牧場を見せたい、見て欲しいという気持ちで仕事をしているが、来訪者に見てもらおうことによって逆に牧場の悪いイメージを与えてしまうのではないかと気が持ちはり、すべての来訪者に牧場を全面的に「開放」することに躊躇するところがあるが、このあたりの問題をどう考えればいいか。

中村哲雄氏

くずまき高原牧場のやり方は、牧場すべてを開放するというのが基本である。

たとえば360人の修学旅行生が来た場合、班構成にして牧場の椎茸生産を含むすべての生産現場を

ローテーションで体験するプログラムとなっている。

牧場全体がきれいなことに越したことはないが、現実の姿で「さあ、いらっしやい」の精神で大いにやられた方がいいのではないかとと思う。

広瀬敏通氏

町の人は、牧場は汚いと思っている。ふん尿はたれ流しだし、地面に座ればお尻が汚れるといった具合である。ところが、ある調査によると、大腸菌は牧場のようなどころにはむしろ少なくて人がいっぱい住んでいるところで大変多い。したがって、町から来る人の方がかえって汚いから、牧場に入る前には手を洗って、牛に感染させないようにと注意する必要があるとも思ったりしている。

質問 2 地域の人たちとのつながりを強化したり共同作業なども一緒にやって行きたいと思っているが、地域との結び付きにいま一つ実感が無い。どのようにすればよいか。

中村哲雄氏

牧場開設当初は、町内との交流とか融和とかいうことを考える余裕がなかった。本来業務を完遂することがもっと大事だとも思っていた。しかし、地域との乖離とか、畜産公社はなにをやっているのかという町の人々の感情も確かにあった。

そこで、「ミルクとワインとクリーンエネルギー



を実感できる町づくり」をキャッチフレーズに唱えて、町に貢献できるような活動を展開することとした。その中で、なにが地域に合うのか、町民は何を欲しているのかを一生懸命考

え、それをタイムリーに出していくことが大事であると気がついた。しかも1回りのイベントではだめでこれをとにかく継続して実施するということが重要である。

広瀬敏通氏

自分の仕事を一生懸命やっても、なかなか地域との人と心が通わないということが多々ある。最初の何回かは足元が見られるようなこともあるかも知れないが、繰り返しささまざまなスタイルを変えて地域に貢献するという気持ちを持ち続けられればわかってもらえるときがくるのではないか。地域には多様な人が居るから、貢献し続ける、それがある意味では一方通行の段階を経て双方向の交流になってくるのだろうという気持ちがある。

まとめ

広瀬敏通氏

体験というものがなぜ必要なのか。「百聞は一見にしかず」、「百見は一行にしかず」という言葉がある。体験とは、体験を通じて深い理解が得られ、しかも一生忘れないような自分にとって宝物のような時間が得られる。そういうものが体験の持つ魅力だろう。

牧場にはいっぱい不思議がある。牛1頭をとってみても本当に不思議の塊だと思う。そしてその不思議さを突き詰めてみると、命というところに突き当たる。命の不思議さというものがあると思うのである。

ほかのあらゆる場所に比べても、牧場にはそうしたものがしっかりとある。命がそこで生まれている。そして、その命を育てている。それに人生を賭けている人たちがいる。牧場に行くとテレビでは体験することができない、実際に手で触って匂いをかいで、足にベチャッとした踏み跡がついたりしながら、体中で感じるができる。そういう牧場が日本中にいっぱいあるんだ。いっぱいあるのに、今まで全然とっていいほど使われてきていない。そう考えると、牧場はという「場」を通じた体験学習の重要性と、その可能性について非常に大きな世界が広がっているのではないか。

皆さんも是非、牧場に出かけ、そして牧場のサポーターとして、ファンとしてファンクラブなどを作ってもらって「おらが町の牧場」という自分にとって大切な場所になるのではないかと思う。この会場にこられた人はファンクラブになっていただく方のごく一部だと思うが、その背景にいる日本中の子供たちにこうした牧場の声を是非届かせていただければいいと思います。

NPO法人ホールアース研究所に関する問い合わせ先

〒419 - 0303

静岡県富士郡芝川町下柚野165

ホールアース自然学校

電話：0544 - 66 - 0790

ファックス：0544 - 67 - 0567

## 家畜動物学概論

ホールアース自然学校指導資料抜粋

ホールアース自然学校 代表 広瀬 敏通

当協会主催の「ふれあい牧場中堅職員研修会」が、平成17年2月17日から18日にかけて大分県において開催されました。この中で、ホールアース自然学校代表の広瀬敏通氏により「目的と目標」と題する講演が行われ、その際の資料として「家畜動物学概論」が披露されました。「人間と家畜とのかわり」、「公共牧場におけるふれあい活動の役割」等今後の公共牧場問題を考えるに当たっているという示唆に富む内容が多く、氏のお許しを頂きその抜粋を本誌で紹介することといたしました。

### 1. はじめに

現在わが国では、牛、豚、鶏（ブロイラー）の三大家畜が「経済動物」として主に飼育されています。いずれも養豚、養鶏など単一種で大規模に飼育され、家畜工場（飼育工場）といわれるような姿も見られます。

一方で、従来、農家の庭先で飼われてきたヤギ、羊、地鶏、赤牛（和牛）などの家畜家禽は急速に姿を消し、いまや日本中、どの農村でも、庭先で遊ぶ家畜の姿を見ることは困難になってしまいました。

短い年月の間に大きく変貌した日本の家畜たちのおかれている現状に憂える形で、ホールアース自然学校では1982年以来、「動物農場」という形で自らの主張を発信し続けています。

そこでの活動の歴史にも触れながら、日本の家畜動物のおかれた状況と問題点、課題について見ることにします。

### 2. 家畜とは

人間が飼いならした動物を一般には「家畜」と呼んでいますが、正確に定義すると、『人間が利用するために野生動物から遺伝的に改良した動物』とされています。

つまり、ペットショップに飼われている蛇や亀、あるいは動物園の動物はいくら慣れている家畜とは呼びません。遺伝的に改良するということは、人間が繁殖を管理し、選抜的に優良な個体を作り出してきたということです。

これらは遺伝子操作といった近代畜産だからできたわけではなく、最後の氷河期以降、急速に野生動物の家畜化が行われてきたことが分かっています。一〜二万年前には牛、羊、豚、犬などが家畜化され、五〜七千年前には鶏、七面鳥、ヤギ、馬が、そして三〜五千年前にはネコ、アヒル、ウサギなどがそれぞれ家畜化されました。現代もエランド（鹿の仲間）、カピバラなどが食料資源として新たに家畜が取り組まれています。

### 3. 家畜の生産物

家畜は、肉、卵、皮、毛、骨、筋、労役を提供してくれ、更には野生動物では得られない、人間の身近な友としての役割など、長い間に欠かせない存在となりました。

1) 食用家畜 = 鶏、牛、羊、ヤギ、アヒル、ウサギ、馬、豚ほか。

現在の世界人口を支える膨大な食肉のほとんどが家畜による畜肉です。野生鳥獣を狩猟して得る肉は、スポーツハンティングが少数民族の伝統的生活に見られるのみで、通常、食肉店では見ることはできません。

食肉流通の仕組みは生産農家（大規模化のもとでは畜産業者）から屠場（食肉センター）で生肉に加工、そこで熟成まで経たのち、食肉店や問屋に並びます。

2) 毛皮用家畜 = 牛、豚、羊、ヤギ、ウサギ、ミン



ク、馬、鹿ほか

毛用家畜としては世界で10億頭、3000種類といわれる羊をはじめ、アンゴラウサギあるいは羽毛用のアヒルなどがあります。

紡いで布にしたり、衣類、寝具の材料になる。毛用家畜は羊のように同じ個体が毎年、毛を提供する場合やアヒルのように屠殺される場合とがあります。

羊/毛用家畜の代表格、羊の毛刈りは年に一度の人間とのエキサイティングな行事であり、羊飼いににとっては幸せなシーズンです。一頭から平均して3~4kgの羊毛が取れ、一家族の衣類は賄えます。

日本では1960年ごろには100万頭飼育され、一般の家庭の庭先に1~2頭は飼われていた。春過ぎに業者が集荷に来て、1kgの原毛に対して380gの毛糸を返品する制度があり、農村ではホームスパンが流行しました。

現在の羊飼養頭数は3万頭、ほとんどすべてが肉用(観光ジギスカン)に又は観光用に飼育されていますが、羊毛利用はわずかに過ぎません。

### 3) 労働用家畜 = 犬、馬、犬、ヤク, リヤマ、ラクダ、ロバ、ほか

家畜が提供する労働には「物を運搬する」ものが多く、牛、馬、ラクダなどが代表です。「耕す」には、馬、牛、水牛など。「番をする」のは犬が圧倒的に多いです。

こうした家畜は屠殺されることで役割を果たす家畜とは違い、行く年も仕事を続けるために、人間との結びつきも深くなり、いろいろなエピソードを生んでいます。ペットもこの家畜群から生まれやすいのです。

### 4) 愛玩用家畜 = 犬、猫、インコ、オウム、文鳥など

愛玩用家畜は特殊な用途と思われがちですが、家畜動物が人なつこく、魅力的な存在であることを考えると、人間と強い精神的な絆を築くことは容易に納得できます。ペットは飼育者の一方的な愛情ではない関係性が生まれていることが大事な点です。しかし、偏執的な一部の愛玩家の存在や悪質なブリーダー(繁殖業者)によ

って、愛玩動物の在り方に偏見を持つ人も少なくありません。

近年では野生動物をペット化する人も現れてきました。途上国から希少な猿、トカゲなどの野生動物が大量に日本に持ち込まれており、大半が輸送中に死んでいる事実が報道されて、国際的にも問題になっています。金で世界各地の貴重な生きものを買って漁っている日本人のあり方は、異常な姿として世界に報道されており、果たして、野生の蛇や亀などが、簡単に飼えるからといって狭いケージで生きていることが幸せかどうか考えてほしいものです。

## 4. 家畜のメンタルな効果

### 1) ペットとしての家畜

家畜が使役や愛玩目的で、飼育者である人間との強い絆が生まれていることは述べました。これは人間と動物が互いに生きているもの同士の連帯感や、世話し、世話されるものの精神的なつながりを生んでいることの表れです。

この点、野生動物をとらえて飼育する「仔鹿物語」のようなケースは稀で、ほとんどは人間に身近な家畜がペットの役割を果たしました。

犬などの「階級」動物の場合、飼育者の人間がボスとして認識されるのですが家族飼育の場合、その家の家長がボスとして認識されます。

しかし、最近では主婦や、OLが飼い犬に咬まれたり、攻撃される事例が増えています。これは階級動物としての犬に過剰なサービスをした結果と分析されています。つまり、その犬は、自分に奉仕してくれる飼い主を自分よりも格下の存在に認識するため、「無礼な行為」に対してお仕置きをします。

「忠犬八子公」のように、犬の主人に対する服従ぶりは様々な逸話を生んでいます。飼育者にとってもこの点はたまらない魅力です。しかし、犬種により性格は大きく2種に分けられます。特定の主人に忠誠を示すもの(チャウチャウ・柴犬・秋田犬など)と、人間全般に従順なもの(コリー・レトリバーなど)です。犬種ごとのファンがいるが、流行は大量の捨て犬や殺処分される犬を生む悲劇の原因でもあります。ペット

大国のアメリカでは多くの家庭で犬かネコを飼っていますが、毎年犬の15%が殺処分され、平均飼育年数は2年という数字があります。日本でも76秒に1頭の犬が殺処分されています。

家畜化の歴史が比較的浅い動物である猫は、今もなお、半野生のような生態を保ち続けています。「人間よりも家につく」とか言われるのも、狩猟獣としてテリトリー意識が強い表れです。犬と同様に人間(飼育者)に対する観察力が高く、相手に応じた対応が取れます。生態系の頂点にいた野生時代の名残で、天性のハンターとして知られています。そのため、街でなく自然界に放置された「捨て猫」は、野生の小動物の天敵となり、深刻な被害を及ぼしています。捨て猫によって地域的に絶滅に追い込まれたと考えられる種も多いのです。

「飼う」といった意識が特にないような関係ができるのも猫の特徴でしょう。一定の時間と場所に餌を求めてやってくる都会の猫たちにとって、餌をくれる人間は「主人」でなくとも構わないのです。この場合、人間と猫は互いに自由な関係を維持していると考えられます。しかし、猫を飼う住環境にない猫好きの人にとって、その「自由さ」が魅力となり、心をとらえます。こうした関係性が精神的な癒しとなっているのです。

### 2) アニマルセラピー

新しい言葉としてのアニマルセラピーは、動物を使った療育行為を指します。現代社会は人と人の希薄な関係が固定化されていて、疎外感を感じている人にとって、いやしがたい環境となっています。

現代のこうした社会では情緒的な障害を抱えている人はますます増加していく傾向があります。しかし、この症状は薬品による治療では良い結果を生みません。

近年、注目されているのがアニマルセラピーです。残念ながら、この用に供することのできる動物を飼育しているものがあまりなく、治療を必要とする人へ行き渡すことは少ないのです。

養護施設や老人ホームにも、慰問する形で犬、

猫、ウサギなどが訪問しています。これも広い意味でアニマルセラピーの一形態と言えるでしょう。

変わったところでは、乗馬を通じた治療や環境教育が行なわれています。日本でもポニースクールなど先進的な活動をしている団体があります。

大きな馬と正面から向かい合う、触れる、乗る、心を通わすなどのアクティビティが、その人の情緒面で顕著な効果をあげています。

### 3) 教育的な効果

動物は意志をもっており、飼育者の感情の機微に敏感に反応します。そこで飼育者はたびたびその動物と「会話」する体験を得ます。こうした体験の積み重ねが、飼育者(または周辺の人間)にとってかけがえのない存在になりうる感情移入が発生します。

人間同士ではなかなか腹を割った関係を築きにくい人が多くいます。

しかし、忠実に自分の帰りを待ってくれる動物がいると、人はその動物を失望させたり裏切ったりできなくなります。そうした心を傾ける相手がいるということは、大きな教育的効果と考えられます。

さらに、家畜(ペット)を飼うということは、人間よりも寿命が短い分、誕生(出産)や、死に立ち会うことがあります。飼うことは「命を育てる」ことであり、その生きものの一生を面倒見るといえることを実感できるはずで

なく、命ある動物です。飼育者としての責任は、他の産業よりも重いのです。飼育中の多数の動物を理由なく殺処分した場合、刑事責任を問われて、拘留されることがあるのも、そうした理由からです。

動物を飼う機会に恵まれない多くの子どもたちに、ホールアース自然学校=動物農場は飼育体験を提供してきました。他の子どもたちと馴染めない子にとって、やさしい動物の存在は自分の居場所を作ってくれ、動物の交流を通して人間関係へと進むことが出来ます。そうした実



例が豊富にあります。

さらに動物農場では、自ら飼ってきた動物を屠殺して食べる「命を食べる」というプログラムが行なわれています。飼う人と、殺す人、食べる人それぞれが別の人であるという今の食肉流通の仕組みは、動物から命を戴いているという事実を見えなくしています。動物農場で飼いつけてきた多くの鶏、仔ヤギ、仔羊は自分たちの手で心をこめて屠殺し、自分たち自ら食すことを信念として行なってきました。今日「命を食べる」プログラムが、環境教育のプログラムとして注目されているのも今の時代を反映した結果であるのでしょう。

## 5. 家畜飼育

### 1) フリースクール = 学校で家畜を飼う

欧米のフリースクールでは、ポニーやヤギなどの飼育体験をさせるところが多くあります。

この効果はすでに見たとおり、動物にしかできない関係を期待してのことです。一般家庭では動物を飼育できない環境が大半のため、こうした機会は貴重といえます。

一般の家庭、社会環境が「命」を感じさせるところから遠く隔たったものであることは言うまでもありません。店で買ったカブト虫を、電池を交換しようとする幼児の逸話は、悲しい現実です。

しかし近年、小学校などの動物飼育室を動物愛護団体が全国的に調査し、「劣悪な飼育環境」であるとして告発するケースが幾例が出てきました。この主張は、学校現場での飼育には限界があるとして、飼育取り止めまで訴えています。ただでさえ、学校の教員に負担な学校現場での飼育には反対も強く、十分な飼育環境ではないケースが多いことは事実です。しかし、それをもって飼育差し止めを言いだす主張はおかしいのではないのでしょうか。学校で動物を飼うことは、子どもたちに動物とふれあう機会を提供することのほうです。飼育素人の教員が中心になって飼うのですから、不適切な場面があることはあらかじめ承知のうえです。

むしろ、地域住民や専門家の協力、世論のバ

ックアップでもって学校の飼育を支えていくことが本筋のほうです。

この無責任なキャンペーンで飼育をやめる学校も多数出ることが予想されます。

家庭や地域社会で動物を飼えない子どもたちから、ますます命ある動物を引き離していく結果にしかありません。

### 2) 遊牧民キャンプ = 動物と暮らすキャンプ / 移動牧場 = 動物を飼う

4泊5日ないし14泊15日というわずかな時間が、このキャンプに参加した子どもと動物との濃密な関係作りの時間です。家庭や学校、地域社会の日常から引き離された子どもにとって、いつしか身にまとった堅い殻を脱ぎ、裸の心で動物と出会う体験となります。

人間との関係作りが苦手な子にとっては、動物の存在は大きな意味を持ちます。抵抗ない動物をいじめたり、追っかけたりオモチャのようにしか見ない子が、朝夕の世話をすることによって、庇護する立場に自分を置くようになります。この頃から動物との関係が変わりはじめ、「対話」ができるようにまでなるにはもう時間はかかりません。キャンプ終了後に愛着をもった動物にあてて手紙がくるのも、こうしたプロセスがあるのです。

人間の暮らしの身近に家畜というタイプの動物がいる、ということを経験的に覚えるためにも、遊牧民キャンプの仕組みは役立っています。ここは動物園ではなく、子どもたちがひと夏暮らすキャンプ場ですが、犬、馬、ヤギ、羊、鶏、ウサギという動物群がたくさんいます。

キャンプ場の日課に動物の世話があり、ご飯を食べると同じように欠かせない日常の行為としてインプットされていきます。もちろん、キャンプが終わり自宅に帰れば、動物たちの姿は跡形もなく消えてしまうとしても、わずかな数日の日々に体験したことは一生忘れない強烈な思い出になって残ります。

## 6. 家畜動物の将来

### 1) 近代畜産が世界の環境に与えている影響も見て

おきましょう。

家畜動物の集中飼育（大規模化）を可能にしたのは、飼料の供給システムでした。農家が自家配合で作っていたのではとても多頭飼育はできません。しかし、世界的な飼料メーカーが大量の餌をつねに供給してくれます。

濃厚飼料は、大豆・麦・とうもろこしなどの穀物を主体に作られます。

鶏、豚は従来から人間と一部の食物が競合してきましたが、近年、濃厚飼料飼育が進んだこともあって、牛、羊、ウサギ、犬、猫など、たいていの家畜動物の飼料も人間と競合するようになってきました。本来は全く人間とは競合しなかった動物種が大半です。

世界人口が膨らみ続け、深刻な食料資源不足が起きはじめています。

それなのに、人間が食べられる膨大な穀物などが家畜用に回されています。

本来の食性に近い粗飼料型に戻すことや、日本などの緑飼（雑草など）生産大国では、そうした未利用資源を活用することが望ましいでしょう。何しろ、食料不足の時代に羊・ヤギだけで170万頭も飼っていた国なのですから。

アジアやアフリカの各地で過放牧が原因とされる砂漠化が進んでいます。

これらの国々では、濃厚飼料はありませんが、狭い縄張りの中を草の再生力を上回る過剰な放牧が進み、ついに根まで食い尽くされる状況になっています。広大な土地を所有するオーストラリアでさえ、土地は痩せていて草の再生力は弱いのです。大規模化してしまった現在、世界的な家畜市場のコントロールが不可欠になっています。地域主義ではますます土地は荒れていくばかりです。

牛の堆肥や、反芻時のゲップなど、動物から発生するメタンガスは、自動車による窒素酸化物に次ぐ大気温暖化の原因物質になっています。

各国で堆肥生産時のメタンガス発生対策は有効な手立てを模索して研究が盛んに行なわれています。

### 2) 人間の食物と家畜 = 持続可能な食物生産

このように見てくると、そもそも家畜による食肉資源の確保は、現在適正規模なのでしょう。

どうも、バランスを欠いた生産と消費になっているようです。

生産は過剰な頭数を自給飼料が手当てできないままに工場化して飼っており、消費は先進国側に極度に集中しています。

アメリカなどでは病的に肥満した人があふれています。なおかつ、我々日本人でさえ食べきれない量の肉を飽食しています。健康を維持するために必要な食事をはるかに越えて食べる人がいる反面、飢えて死んでいく子どもも膨大な数でいます。

21世紀を迎えて、我々人類の食物について考え直す時期がきています。

地球規模で家畜生産の計画的な地域配分、食料資源の再見積もりを行い、消費型ではない、持続可能な食物生産をはじめる必要があります。

古くて新しい食料資源である昆虫や魚の自然を損ねない持続可能な養殖技術、人類の食文化の新しい開拓は、待ったなしです。

### 3) 庭先（小規模）飼育の復活 = 農的な生活環境の整備

地球規模の努力は地域から始まります。

家畜の不自然な大規模飼育をやめ、あるいは考え直させるためにも、もう一度、庭先飼育の復活を広め、そのことで得られるさまざまなメリットを研究すべきでしょう。

消費者との直結も必要になります。庭先飼育した健康な畜肉のブランド化、流通に乗る仕組みはそう難しくはありません。

私たちホールアース自然学校の前身であった動物農場では700羽の自然卵養鶏を行なっていましたが、首都圏からもたくさん買いにきてくれ、静岡県の物産展では当時、一番人気で閉館前に予約で売り切れ状態でした。

また、自家配合で作った天然の飼料は、卵アレルギーの子が食べても安心な卵を作り、TVなどでも話題になりました。



前述したとおり、日本は石油資源は少ないですが、代わりにどの国よりも豊富な緑の資源があります。この緑飼を有効に使った庭先（少頭羽）飼育は、コストもかからず、何処でもでき、高齢者の労働でも可能です。同時に人工林や雑木林の下草対策ともなり、メリットは幅が広いのです。

現在、底を打っているかに見える日本の農業も、今後は都市住民の参入を迎えて長期的に上向きになることは確信できます。

2千年以上の農耕の歴史をもつ国であるにもかかわらず、この近年はあまりに急速に非農環境に走りすぎました。気が付いたら食料自給のできない国になっていました。

また、土をいじらない国民ばかりになっています。この人たちが今、「農」に帰ろうと深く、広く、静かに大波を起こし始めています。21世紀はあらためて、農的環境、農的生活が始まるはずです。その時ではなく今から、人類の食料を見据えた生き方を提案すべきでしょう。

家畜動物学は、机上の研究ではなく、実践の学問です。自らの手を泥まみれにし、糞尿を日々掃除しながら学ぶことです。楽をしようと考えず、困難さを工夫で乗り切る楽しみにかえるのが、飼育者の幸せです。

## 7. ふれあい牧場の役割

これまで見てきたように、現代日本の社会が身近に親しみのある動物の姿を失っているばかりでなく、人間同士のつながりまでもが希薄になっていることが各界から指摘されています。そうしたときに、のどかで、牧歌的なふれあいが出来、専門的な飼育者のいるふれあい牧場の果たす役割はおのずと大きなものが期待されます。

前項では、近代畜産の負の部分を取り上げてみてきましたが、ここからはプラスの効果を考えてみます。

1)『畜産は3K（きつい、汚い、危険）だ。』と多くの人が思ってきました。

だから、牧場や畜産農家のほとんどが一般の人の受け入れを拒み、交流をもたないままの経営を

してきました。事実、糞尿はもちろんのこと、種々のゴミや廃材まで乱雑に置かれたままの畜産農家がとても多いことは周知の事です。

身だしなみに気を使うゆとりの無い日々の労働はついこの間まで、ヘルパーの助けも無く、一家で旅行すら出来ない辛いものでした。

しかし80年代に入って、牧場を舞台にしたアニメがたてつづけに放映されたり、交流型の観光が盛んになってくるに連れて、畜産本来の魅力を活かした試みが各地で起きてきました。

2) 第1次が「観光牧場ブーム」です。

国内で条件の整った牧場が続々と場内を開放し、入場収入を経営の大きな柱にする所が生まれました。ここでは、「乳搾り体験」「バター、チーズ作り」や牛以外の動物もおいて、「羊の毛刈体験」「糸紡ぎ体験」さらに「乗馬体験」など体験型の楽しさを提供することで人気を集めたのです。

その一方、問題点としては牧場の現場そのものである飼育の裏側は見せない牧場がほとんどでした。観光客は汚いものは嫌いだ、という先入観が観光牧場の表と裏を作っていたのです。

3)「体験農場」が第2次のブームになりました。

それまでの観光牧場が比較的大きな経営だったのに比べ、各地でオープンした「体験農場」は小規模経営が多く、その分、表も裏も無いすべてオープンが売りでした。

ここでは農家のおじさん、おばさんといった顔の見える親しみやすさが人気を呼んで、果樹、野菜、稲作など畜産以外の農家がどしどし出てきました。

4)そして、第3次の波が「教育ファーム」であり、「新規就農」です。

体験型で鍛えられた消費者はなまじっかのお仕事せ観光では満足しません。

自ら楽しむことに熱心です。そして、うわべだけのおとぎの国では足元を見てしまい、正々堂々とした経営に魅力を感じます。

「教育ファーム」はその経営理念に共鳴できる

ことで、強いファンを作りました。

しかも、世界的なネットワークもあり、取り組み次第ではいか様にもメニューを開拓することが出来ます。何より、「教育」を標榜している限り、消費者が警戒するうさんくささがだいぶ軽減されます。さらに、その上を行く消費者はついに「就農」の道を選びました。

農の世界に人生を掛けようというのです。

若い人の波以外に目立つのは、中高年の「第2の人生」型です。様々な動機を見ていくと、つくづく、人は土の魅力から離れられないのだからと感じます。

5) ふれあい牧場は公共牧場が多く、大規模であるが故の小回りの無さやスタッフの味気なさが良く取り上げられます。

一方で、効率的な草地管理や畜舎管理は他には真似の出来ない規模でもあります。

とくに、小規模農家では受け入れ困難な小中学校などの大きな集団にも対応が出来ます。

家族連れなどの観光対応や細かな体験メニューは小規模教育ファームにまかせるとして、ふれあい牧場では、とくに感受性の豊かな世代である、子ども達にこそ、生き物とのふれあいの魅力、感動を伝えてもらいたいと思います。

わが国では、まだまだ、学校団体が大規模に動く習慣があります。こうした学校の子も達に、飼育の本音を語れる人間味ある飼育者がいる必要があります。

学校は、選ばれた子どもがいるのではなく、すべての子がいます。もしかすると、一生で初めての動物体験かもしれない子もいるし、これが最後の体験になる子もいるかもしれないのです。

ふれあい牧場は安易な観光施設であってはなりません。

生き物と向き合う真剣勝負をする人たちのいる仕事場なんだと子どもに分かってもらうことが大事です。本当にこの動物を大事に慈しんでいる姿が大事なのです。

そのためには、近代畜産の落とし穴であった、動物飼いと動物との心理的断層を乗り越えて、

牧場仕事の魅力を伝えることのできる飼育者がいて欲しいと思います。

6) ふれあい牧場でしか出来ないことはなんだろうか。

それは、日々そこに働いている人ならば良く分かっている事です。

牧場を生産の場であると同時に、教育の場として、潤いの場として広く開放し、それに相応しい施設や教材をそろえることであるでしょうし、牧場という場にきた子ども達が心に暖かな感動を持ち帰らせることができることだろうし、こうした仕事の魅力を知らせることで、人生や未来に希望を持ってもらうことでもあるでしょう。

でも、これまでに見てきたように、どんなに施設や設備を設けてもそれ以上に肝心な事は人の存在だということです。

人は人にもっとも心を動かされるし、影響を受けます。

ふれあい牧場の職員はとても大きな役割りを背負った人たちののだということです。

その人の一言、些細なそぶりが相手に影響します。それが「ふれあい」なのだと言って良いでしょう。

**事務局からのお知らせ**

協会のホームページをリニューアルしました。  
(ホームページアドレス <http://souchi.lin.go.jp>)

社団法人日本草地畜産種子協会では2月1日に協会のホームページを「飼料増産」を柱として全面的にリニューアルいたしました。

全体の構成は、飼料増産情報、飼料作物品種・種子情報、技術情報、牧場案内、農林水産省情報、協会案内、協会行事及び稲発酵粗飼料売買掲示板から成り立っています。

それぞれの内容は次のとおりです。

これからも情報の収集に努め内容の充実を図って参りますのでぜひご活用ください。

飼料増産情報 飼料増産推進に係る協会情報などのリンク集です。	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 飼料増産</li> <li>2) コントラクター</li> <li>3) 放牧</li> <li>4) 耕畜連携</li> <li>5) 草地更新</li> <li>6) 消費者への情報提供</li> </ul>	<p>農水省畜産部HP / 全国飼料増産戦略会議、協会HP / 技術情報 (飼料増産ホットニュース) にリンク</p> <p>協会HP / 協会案内 (コントラクター全国協議会) / 協会HP / 技術情報 (情報誌) / 協会HP / 協会行事 (コントラクター情報連絡会議) へリンク</p> <p>協会HP / 協会行事 (放牧サミット) / HP / 牧場案内、HP / 技術情報 (放牧事例) / HP / 技術情報 (情報誌G&amp;S) へリンク</p> <p>農水省畜産部HP / 耕畜連携推進対策、HP / 情報誌G&amp;Sへリンク</p> <p>HP / 技術情報 (草地更新) / HP / G&amp;Sにリンク</p> <p>HP / G&amp;S、HP / 協会案内 (ふれあい牧場協議会) へリンク</p>
飼料作物品種・種子情報 飼料作物の品種・種子及びそれに関する各種の情報です。	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 良い種子とは</li> <li>2) 証明種子</li> <li>3) 品種証明資格品種リスト</li> <li>4) 飼料作物品種一覧</li> <li>5) 国内育成品種</li> </ul>	<p>良い種子の条件等</p> <p>協会の種子証明の案内</p> <p>協会の証明する品種のリスト</p> <p>ナショナルリストに掲載されている品種及び協会の証明対象品種と増殖種子を掲載。それぞれの品種の特性。</p> <p>平成14年～16年度にかけて登録された品種一覧</p>
技術情報 協会のグラス&シード、飼料増産ホットニュース及び協会の行った調査、研究成果等	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 協会情報誌グラス&amp;シード</li> <li>2) 飼料増産ホットニュース</li> <li>3) 飼料増産事例集</li> </ul>	<p>創刊号から最近号までを収録</p> <p>創刊号から最近号までを収録 飼料増産ホットニュースに寄せられた情報のうち、紙面の都合で掲載できなかったものを中心に各地の飼料増産にかかる様々な取組みを紹介。 (現在制作中)</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>4) マニュアル・パンフレット</li> <li>5) 技術資料関係報告書</li> <li>6) 出版物</li> </ul>	<p>協会の作成したパンフレット等 現在「草地更新」、「放牧事例」を掲載</p> <p>協会の行った調査及び研究事業の報告書。</p> <p>協会が発行する販売書籍</p>
牧場案内 全国公共牧場一覧、ふれあい牧場協議会加入牧場一覧等	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 持続型草地畜産展示牧場等</li> <li>2) 全国公共牧場一覧</li> <li>3) ふれあい牧場協議会加入牧場</li> </ul>	<p>展示牧場37牧場及び放牧優良事例牧場8牧場 制作中</p> <p>ふれあい牧場のHPにリンク</p>
農林水産省情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) ニュースリリース</li> <li>2) 耕畜連携推進対策</li> <li>3) 資料「めぐる情勢」</li> </ul>	<p>農林水産省のニュースリリースのうち飼料増産等に係るものにリンク</p> <p>農林水産省畜産部畜産振興課の飼料をめぐる情勢 公共牧場をめぐる現状と課題 コントラクターをめぐる状況を掲載</p>
協会案内	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 協会の情報</li> <li>2) 業務及び財務に関する資料</li> <li>3) ふれあい牧場協議会</li> <li>4) コントラクター全国協議会</li> <li>5) 飼料作物研究所</li> <li>6) 山地畜産推進協議会</li> </ul>	<p>協会の概要、沿革、本所・支所・研究所の住所、地図等</p> <p>協会の定款、会員名簿等、事業報告、収支計算等</p> <p>同協議会の案内及び牧場一覧、牧場へのリンク</p> <p>協議会の案内、会員名簿及びコントラクター情報連絡会議等</p> <p>協会の飼料作物研究所の紹介及び研究成果等</p>
協会行事 協会の行う主な行事のスケジュール等	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 最近イベントスケジュール</li> <li>2) 全国草地畜産コンクール</li> <li>3) 放牧サミット</li> <li>4) コントラクター情報連絡会議</li> </ul>	<p>コンクールの開催要領、開催内容等</p> <p>協会の行う放牧サミットの内容等</p> <p>これまでに行われた連絡会議の事例報告</p>
稲発酵粗飼料売買掲示板 全国各地で生産される稲発酵粗飼料のよりいっそうの利活用を図るための売買掲示板	「売ります情報」、「買います情報」の掲示	



## 庭先に牛を繋ぎて雛飾る

土男

牛飼農家の庭先での所見である。春といってもこの頃はまだ寒い日もある。北国であれば、あたりに雪が残り、山は残雪に輝いていようか。

庭先に子牛が繋いである。大事に育てて、やがて山の牧場に登る牛である。子供たちは時にここに集まって来て子牛と戯れる。こうして牛飼の子供たちは命と触れ合って育てゆくのである。家の中にはこの家の女の子のために雛が飾ってある。子牛のために雛は飾られているようにも思われる。梅も咲き出していようか。春を迎えた牛飼の華やいだ暮らしを思っていただければよい。

### G & S 俳壇

### 太田土男 選

入 選

歌ふよに語り出しけり桃の花  
雲雀こち東風羊の出産続きけり

藤市 赤澤方子

一句、「歌ふよに」がよい。桃の花の季語と思い合わせると幼い子に楽しい昔話を語っているのかも知れない。二句、雲雀の声の交じる東風。春の訪れた牧場の喜びが「続きけり」に込められている。

若草に牧夫と仔牛戯るる

那須塩原市 及川房子

牧夫の忙中の閑。ほほえましい情景である。

風雪が削りし那須山の齒型

那須塩原市 及川棟雄

齒型の比喩が、稜線の荒々しさを描ききっている。破調のリズムも一句に添っている

読み返す手紙の端に梅のこと

横浜市 垂石征一

どんな手紙かは分からないが、内容は軽くない。しかし、端に「梅が咲き出しました」とでも書いてあれば、心は和む。

みちのくの泊まり三日の海風なまこかな

府中市 智田喜久雄

三日続けて出たか、三日目に出たかは分からぬが、これもみちのくぶり風か。旅情がある。

寒風に打ち逆ひて福はうち

台東区 山住真子

「打ち逆ひて」に一途な気持ちが出ている。

梅東風の香りに乗りに母逝きぬ

川崎市 山田茂

梅の匂いの交じる東風。母へのよき鎮魂の一句である。

春節や遠雷のごとく花火続く

北京市 山下憲博

「遠雷のごとく」に賑わいをよく伝えている。

春浅し心のゆるむ友と酒

江東区 望月てる美

これが美酒というもの。「春浅し」でほのぼのとした雰囲気醸している。

こはれゆく心に痛し冬月夜

那須塩原市 毛利和子

「こはれゆく」がやや抽象的だが、冬の月の刺さるような光の感触。



## 飼料増産虎の巻(5つの行動)

- 1 主役はコントラクター!
- 2 牛を放そう!
- 3 耕畜連携を進めよう!
- 4 草地をリフレッシュ!
- 5 消費者へ情報を!

## 社団法人 日本草地畜産種子協会

(全国飼料増産戦略会議事務局)

会長 浅野 九郎 治

〒104-0031 東京都中央区京橋1丁目19番8号(大野ビル)

TEL 03-3562-7032 FAX 03-3562-1651

ホームページアドレス <http://souchi.lin.go.jp>

## 社団法人 日本草地畜産種子協会

〒104 - 0031 東京都中央区京橋 1 丁目19番 8 号 大野ビル

電話 03 - 3562 - 7032 FAX 03 - 3562 - 1651 E-mail : [info@souchi.lin.go.jp](mailto:info@souchi.lin.go.jp)

ホームページ

社団法人 日本草地畜産種子協会 : <http://souchi.lin.go.jp>

ふれあい牧場 : <http://www.fureaibokujyo.jp/index.htm>



# Enjoy

# 地方競馬

馬の熱だけ夢がある



地方競馬全国協会

地方競馬の収益金を活用して全国の畜産の振興のために補助金を交付しております。



全国24場からお届けします。